

# 玉に寄する——万葉集譬喩歌考——

はじめに

万葉集で玉とはどのようなものをいうか。まず、真珠、翡翠や石を磨いたもの、円い石・小石、外国渡来の玉、竹を輪切りにしたもの、露といった、実際に円い形をしたものをあげることができる。また、あやめ、橘、卯の花、棟の花や実に係や紐などを通し輪状にし玉のようにしたもの、のいうものもあり、これらはおおむね円いものと認識できるものである（これらは「玉に貫く」として歌われるものだが、これは、いわゆる薬玉をさすとする見解もある）。

また、玉そのものでなく、玉につけられた、玉に通した紐（玉の緒）が主体になっているもの、「玉の緒ばかり」という熟語として、ほんの少しの間の意味になっているものもある。

玉が譬喩に用いられているものは、真玉なす（五・八一三）、（白）玉の（五・九〇四、九・一七九二、十九・四一六九、四一七〇、二十・四三七八）、玉のごと（十一・二三五二）、ま玉なす（十三・三三六三）のように直喩として、真珠や磨いた玉をもって、愛しい者、称えられる者を譬えるのに用いられている。また、……は玉（七・一四一五）や、玉とみる・玉となす（十・二一六八、二二二九、十七・三九一三、十九・四一九九）、玉ならば（三・四三六、四・七二九）、玉であってほしい（四・七三四、十七・三九九〇、十七・四〇〇六、四〇〇七、二十・四

小野寺 静 子

三七七）なども、愛すべきもの、称えるものを玉になす表現である。

本稿では、玉に寄せる歌、すなわち玉の譬喩歌をみていくが、前稿（譬喩の歌——植物の喩）、「札幌大学女子短期大学部紀要」二十五平成七年三月、「譬喩歌考——譬喩の媒体が植物であるもの——」「札幌大学女子短期大学部紀要」二十六 平成七年九月）のように、譬喩の媒体と述語が結び付いた譬喩表現、喩表現のものをみていく。この際、「玉は乱れて」（三・四二四）を含めて「玉の緒」が譬喩になっているものは、別にしてみる。「玉を手を巻く」、「手に巻ける玉」の類は、糸や紐に通した玉を手を巻くの謂だが、特に玉に通した糸や紐が譬喩になっているわけではないので、前者に入れた。

まず、問題となるものについて、若干述べておく。三・四〇三は、「玉」を坂上大嬢に譬えていたが、喩性は特に認められないので省いた。「韓衣着奈良の里の妻松に玉をし付けむ良き人もがも」（六・九五二）は、喩表現である「岩隠りがよふ玉を取らずは止まじ」（六・九五二）を承けているので、奈良の里の松（女をさす）——わたしと逢ってくる良い人がほしいものだ、と解し喩表現とみたい。

白玉を手に取り持して見るのすも家なる妹をまた見てももや

（二十・四四一五、防人）

は、「白玉を手に取り持して見る」で寓意を示すが、「のす」で「白玉を手に取り持して見る」を譬喩表現とし、「家なる妹をまた見てももや」と具

体的に示す方法をとっているところから、寓喩表現とはとらない。

寓喩表現は、寓喩の媒体及びその類縁によって重ね用いられるのだが、その組み合わせが体言＋述語のものと、述語＋体言のものがある。まず、前者からみていきたい。

## 一

寓喩の媒体及びその類縁によつての重ねが体言（「玉」）＋述語のものを、具体的に歌をあげて見ていく。

玉を手を巻く……自分のものにする

一日には千重波敷きに思へどもなぞその玉の手に巻きたき

（三・四〇九、譬喩歌、駿河麻呂）

白玉を手には巻かずに箱のみに置けりし人そ玉嘆かする

（七・一三二五、譬喩歌）

秋風は繼ぎてな吹きそ海のそこ沖なる玉を手を巻くまでに

（七・一三二七、譬喩歌）

さ雄鹿の萩に貫き置ける露の白玉あふさわに誰の人かも手に巻かむ  
ちふ

（八・一五四七、八束）

白玉を巻きて持ちたる今よりは我が玉にせむ知れる時だに

（十一・二四四六、寄物陳思）

白玉を手を巻きしより忘れじと思ひしことはなにか終はらむ

（十一・二四四七、寄物陳思）

玉を梓弓に巻く……恋人を大切にする

梓弓末に玉巻きかくすす寝なななりにし奥をかぬかぬ

（十四・三四八七）

玉を付ける……逢ってくれる

韓衣着奈良の里の妻松に玉をし付けむ良き人もがも

玉を（潜き）取る……自分のものとする、結婚する  
（六・九五二、金村或云千年）

見渡せば近きものから岩隠りかがよふ玉を取らずは止まじ

（六・九五二、金村或云千年）

あぢ群のとをよる海に舟浮けて白玉採ると人に知らゆな

（七・一二九九、譬喩歌、人麻呂歌集）

海神の手に巻き持てる玉故に磯の浦回に潜きするかも

（七・一三〇一、譬喩歌、人麻呂歌集）

海の底沈く白玉風吹きて海は荒るとも取らじは止まじ

（七・一三二七、譬喩歌）

底清み沈ける玉を見まく欲り千度そ告りし潜きする海人は

（七・一三一八、譬喩歌）

大きな海の水底照らし沈く玉斎ひて取らむ風な吹きそね

（七・一三一九、譬喩歌）

伊勢の海の海人の島津が鮑玉取りて後もか恋の繁けむ

（七・一三二二、譬喩歌）

玉を手を巻く、（潜き）取るは、玉を身につける、取るということ、異性を自分のものとする、結婚するの寓喩として用いられる。これに準ずるものとして、やはり、自分の知覚内にあるということ、玉を見る……逢う、じぶんのものにする

をちこちの磯の中なる白玉を人にしらす見むよしもがも

（七・一三〇〇、譬喩歌、人麻呂歌集）

海神の持てる白玉見まく欲り千度そ告りし潜きする海人は

（七・一三〇二、譬喩歌、人麻呂歌集）

潜きする海人は告れども海神の心し得ねば見ゆといはなくに

（七・一三〇三、譬喩歌、人麻呂歌集）

底清み沈ける玉を見まく欲り千度そ告りし潜きする海人は

玉を知る……懇意になる

(七・一三一八、譬喩歌)

近江の海沈く白玉知らずして恋せしよりは今こそ増され

(十一・二四四五、寄物陳思)

白玉を巻きて持ちたる今よりは我が玉にせむ知れる時だに

(十一・二四四六、寄物陳思)

も、同様な譬喩として用いられる。これと逆なことの譬喩として、玉を箱に置く……顧みない

白玉を手には巻かずに箱のみに置けりし人ぞ玉嘆かする

(七・一三二五、譬喩歌)

は、大切にするという意の喩喩ともとれるが、「嘆かする」とあるところによると、ここは自分の手元におかず箱に入れておくで、顧みないの意を寓するのだろう。また、

玉を授ける……嫁がせる

玉守に玉は授けてかつがつも枕と我はいざ二人寝む

(四・六五二、坂上郎女)

は、娘を嫁がせる譬喩としても用いられる。

玉は二つない……大切な娘は二人といない

いなだきにきすめる玉は二つなしかにもかくにも君がまにまに

(三・四一二、譬喩歌、市原王)

以上、いずれも玉に対する動作から寓するところは十分予想し得るものといえる。

## 二

組み合わせが述語(「玉」を形容する働き)＋体言(「玉」のものは、述語の部分は体言(玉)を形容する働きをなしている。これらの例を見

ていく。

「手に巻ける玉」……愛した異性

こもりくの泊瀬娘が手に巻ける玉は乱れてありと言はずやも

(三・四二四、山前王)

「照左豆が手に巻き古す玉」……愛した異性

照左豆が手に巻き古す玉もがもその緒は替へて我が玉にせむ

(七・一三二六、譬喩歌)

は、前述の「玉を手巻く」、「玉を見る」と同じ喩喩である。

「いなだきにきすめる玉」……大切に育ててきた娘

いなだきにきすめる玉は二つなしかにもかくにも君がまにまに

(三・四一二、譬喩歌、市原王)

「くしげの内の玉」……大切な女性

草枕旅には妻は率たれどもくしげの内の玉こそ思はゆれ

(四・六三五、湯原王)

岩の中で照る玉、海神が持つ玉、海底の玉、水底の玉……なかなか手に

入れることができない女性、深窓の女性

見渡せば近きものから岩隠りかがよふ玉を取らずは止まじ

(六・九五二、金村或云千年)

海神の持てる白玉見まく欲り千度そ告りし潜きする海人は

(七・一三〇二、譬喩歌、人麻呂歌集)

海の底沈く白玉風吹きて海は荒るとも取らじは止まじ

(七・一三二七、譬喩歌)

底清み沈ける玉を見まく欲り千度そ告りし潜きする海人は

(七・一三二八、譬喩歌)

大きな海の水底照らし沈く玉斎ひて取らむ風な吹きそね

(七・一三二九、譬喩歌)

水底に沈く白玉誰が故に心尽くして我が思はなくに

(七・一三二〇、譬喩歌)  
海の底沖つ白玉よしをなみ常かくのみや恋ひ渡りなむ

(七・一三二三、譬喩歌)  
秋風は継ぎてな吹きそ海のそこ沖なる玉を手を巻くまでに

(七・一三二七、譬喩歌)  
近江の海沈く白玉知らずして恋せしよりは今こそ増され

(十一・二四四五、寄物陳思)

海神が手に巻く玉……なかなか手に入れることができない女性、深窓の

女性

海神の手に巻き持てる玉故に磯の浦回到潜きするかも

(七・一三〇一、譬喩歌、人麻呂歌集)

「伊勢の海の海人の島津が鮑玉」……鄙の女性

伊勢の海の海人の島津が鮑玉取りて後もか恋の繁けむ

(七・一三二二、譬喩歌)

「をちこちの磯の中なる白玉」……周囲の見る目の多い女性(井出至氏

は「あちらこちらの女たちの寓喩」とす

る。「万葉集の『譬喩歌』」「語文」四十二

昭和五十八年十一月)

をちこちの磯の中なる白玉を人にしらず見むよしもかも

(七・一三〇〇、譬喩歌、人麻呂歌集)

「照左豆が手に巻き古す玉」、「いなだきにきすめる玉」、「伊勢の海の海人の島津が鮑玉」は特殊であるが、他は普遍的で寓するところが自然に理解できる。

### 三

玉の緒が寓喩表現となっているものについても、二通りにわけること

ができる。譬喩の媒体としての「玉の緒」+述語のものからみていく。  
玉の緒を貫く……結ばれる

白玉は緒絶えしにきと聞きし故にその緒また貫き我が玉にせむ

(十六・三八一四)

白玉の緒絶えはまこと然れどもその緒また貫き我が玉にせむ

(十六・三八一五)

玉の緒をくくり寄せる……結婚する

白玉の間開けつつ貫ける緒もくくり寄すればまたも逢ふものを

(十一・二四四八、寄物陳思)

玉の緒のくくり寄せつつ末つひに行きは別れず同じ緒にあらむ

(十一・二七九〇、寄物陳思)

玉の緒を沫緒に搓って結ぶ……いつか会えること(か?)

玉の緒を沫緒に搓りて結べらばありて後にも逢はざらめやも

(四・七六三、紀女郎)

玉の緒を片糸で搓る……片恋

玉の緒を片緒に搓りて緒を弱み乱るる時に恋ひざらめやも

(十二・三〇八一、寄物陳思)

玉の緒を替える……人妻を自分のものとする

照左豆が手に巻き古す玉もがもその緒は替へて我が玉にせむ

(七・一三二六、譬喩歌)

玉の緒を貫く、くくる、搓るの類は結ばれるの意を寓するが、これに  
対して緒が切れる、絶える、解くは、これとは反対の意を寓する。

玉の緒が絶える……心かわる

世間は常かくのみか結びてし白玉の緒の絶ゆらく思へば

(七・一三二一、譬喩歌)

白玉は緒絶えしにきと聞きし故にその緒また貫き我が玉にせむ

(十六・三八一四)

白玉の緒絶えはまこと然れどもその緒また貫き我が玉にせむ

(十六・三八一五)

玉の緒を解く……二人の仲をさく

葦の根のみもころ思ひて結びてし玉の緒といはば人解かめやも

(七・一三三四、譬喩歌)

玉の緒が切れ乱れる……恋心が錯乱する

玉の緒を片緒に搓りて緒を弱み乱るる時に恋ひざらめやも

(十二・三〇八一、寄物陳思)

片糸もち貫きたる玉の緒を弱み乱れやしなむ人の知るべく

(十一・二七九一、寄物陳思)

玉の緒が切れ乱れる……死ぬこと

こもりくの泊瀬娘が手に巻ける玉は乱れてありと言はずやも

(三・四二四、山前王)

この中の三・四二四は、恋のまつわる寓喩でなく異例であるが、寓するところは前述に同じといってよい。

次に、述語(「玉の緒」を形容する)＋「玉の緒」の形で寓喩になつて  
いるものとしては、

「結びてし白玉の緒」、「結びてし玉の緒」……堅く契つた仲

世間は常かくのみか結びてし白玉の緒の絶ゆらく思へば

(七・一三二一、譬喩歌)

葦の根のみもころ思ひて結びてし玉の緒といはば人解かめやも

(七・一三三四、譬喩歌)

「片糸もち貫きたる玉の緒」……片思いの恋

片糸もち貫きたる玉の緒を弱み乱れやしなむ人の知るべく

(十一・二七九一、寄物陳思)

「白玉の間開けつつ貫ける緒」……間をあけて逢う

白玉の間開けつつ貫ける緒もくくり寄すればまたも逢ふものを

これらも、結ぶ、貫くが表現によつてその様は異なるが結ばれることを寓する。

#### 四

ここでは、玉の緒に限らず、紐、糸状のものがどのような寓意を有するのかをみていく。

山橘を糸で貫く……自分のものにする

紫の糸をそ我が搓るあしひきの山橘を貫かむと思ひて

(七・一三四〇、譬喩歌)

片搓りに糸をそ我が搓る我が背子が花橘を貫かむと思ひて

(十・一九八七、譬喩歌)

糸を片搓りに搓る……片思いである

片搓りに糸をそ我が搓る我が背子が花橘を貫かむと思ひて

(十・一九八七、譬喩歌)

糸をくりかえし巻く……繰り返し相手を思う

河内女を手染めの糸をくりかえし片糸にあれど絶えむと思へや

(七・一三一六、譬喩歌)

弓束巻き替へる……新しい女にのりかえる

梓弓弓束巻き替へ中見さしさらに引くとも君がまにまに

(十一・二八三〇、譬喩)

寄せ綱延へて寄する……何とかして自分のものにしよう

多胡の嶺に寄せ綱延へて寄すれどもあにくやしづしその顔良きに

(十四・三四一一)

他に「かなし妹を弓束並べ巻きもころ男のこととし言はばいや堅増しに」(十四・三四八六)も寓喩の歌とれるが、意味するところは定か

でない。「玉の緒」の場合と同様、ここでも貫く、巻く、縫るの類は結ばれるの意を寓する。これに対して糸・紐が絶える、解くはこれとは反対の意を寓する。

片糸が絶ゆ……片思いが絶える

河内女を手染めの糸をくりかえし片糸にあれど絶えむと思へや

(七・一三一六、譬喩歌)

紐の緒が絶える……男女関係が絶える

白たへの我が紐の緒の絶えぬ間に恋結びせむ逢はむ日までに

(十二・二八五四、人麻呂歌集、寄物陳思)

綱は絶ゆ……別れる

埼玉の津に居る舟の風をいたみ綱は絶ゆとも言な絶えそね

(十四・三三八〇)

が、その例としてあげることができる。他には、

標縄越える……親の目をかすめる

祝部らが斎ふ社のもみち葉も標縄越えて散るといふものを

(十・二三〇九、譬喩歌)

も、標縄のさまが寓喩になっているものといえる。

## 五

譬喩歌「寄玉」の玉が真珠、石を磨いたもの——宝石類——としての玉であるように、玉が譬喩に用いられるのは、真珠などの玉に限られる。そういう玉に実際に糸や紐を通す場合、「竹玉を間なく貫き垂れ」(三・四二〇、十三・三二八四)、「竹玉をしじに貫き垂れ」(九・一七九〇、十三・三二八六)とあるように、「玉を貫く」と表現するようである。が、集中には、「玉に貫く」という表現も多い。これらはどういう玉であり、どういう場合に用いられるのであろうか。

我がやどの尾花が上の白露を消たずて玉に貫くものにもが

(八・一五七二、家持)

玉に貫き消たず賜らむ秋萩の末わくらばに置ける白露

(八・一六一八、湯原王)

は、白露を玉として「玉に貫く」という。白露自体は確かに丸いもので、形の上では玉といってよいが実際には糸を通すことはできない。だから願望とか戯歌的な贈歌に用いられているのであり、「白露を玉に貫く」とは、白露を玉に見立てて糸・紐に通すということである。「さ雄鹿の萩に貫き置ける露の白玉あふさわに誰の人かも手に巻かむちふ」(八・一五四七、八束)によれば、「白露を玉に貫く」のは手に巻くためである。

同様に、「——を玉に貫く」、あるいは「——は玉に貫く」といういい方の、

……ほととぎす 鳴く五月には あやめ草 花橘を 玉に貫き 一  
に云ふ「貫き交へ」縋にせむと(三・四二三、山前王或云人麻呂)  
……白たへの 袖にも汲入れ かぐはしみ 置きて枯らしみ 落ゆ  
る実は 玉に貫きつつ 手に巻きて 見れども飽かず……

(十八・四一一、家持)

は、あやめ草と花橘を玉に貫く、橘の実を玉に貫くのであり、

……そこ故に 心なぐさに ほととぎす 鳴く初声を 橘の 玉に  
あへ貫き かづらきて 遊ばむはしも……(十九・四一八九、家持)  
ほととぎすいたくな鳴きそ汝が声を五月の玉にあへ貫くまでに

(八・一四六五、藤原夫人)

ほととぎす汝が初声は我にもが五月の玉に交じへて貫かむ

(十・一九三九)

は、ほととぎすの声を橘の玉に交え貫く、ほととぎすの声を五月の玉に交え貫くのである。これらは具体的にはどういうことをいうのであろう

か。これらの玉は薬玉のことと解されることが多いが、芳香を放つ麝香、沈香などを袋につめ、香りの高い植物の葉や実を添えて五色の糸を垂らしたものとしての薬玉は、この時代にあったかは不確かである。「白露を玉に貫く」と同様に、あやめ草と花橘、橘の実を玉に見立てて糸・紐を通すことをいうので、ほととぎすの声を交え貫くというのは、玉と見立てた橘の玉、五月の玉にほととぎすの声を交え糸・紐を通すということであろう。天平十九年五月五日の「太上天皇詔して曰く、『昔者、五日の節には常に菖蒲を用て縵とす。比来已にこの事を停やたり。今より後、菖蒲の縵に非ずは宮中に入るること勿れ』とのたまふ」ともみえるように、玉と見立てて糸・紐を通したものは手に巻いたり縵にしたりしたもので、いわゆる薬玉はこれらに該当しないのではないだろうか。

我がやどの花橘のいつしかも玉に貫くべくその実なりなむ

(八・一四七八、家持)

我がやどの花橘は散り過ぎて玉に貫くべく実になりにけり

(八・一四八九、家持)

ほととぎす待てど来鳴かずあやめ草玉に貫くべく実になりにけり

(八・一四九〇、夏雑)

五月の花橘を君がため玉にこそ貫け散らまく惜しみ

(八・一五〇二、坂上郎女)

いかにいかに ある我がやどに 百枝さし 生ふる橘 玉に貫く

(八・一五〇七、家持)

五月を近み……

(十・一九六七)

玉に貫く棟を家に植ゑたれば山ほととぎす離れず来むかも

(十七・三九一〇、書持)

玉に貫く花橘をともしみしこの我が里に来鳴かずあるらし

我がやどの花橘を花ごめに玉にそ我が貫く待たば苦しむ  
(十七・三九八四、家持)

や、

ほととぎす何の心そ橘の玉貫く月し来鳴きとよむる

(十七・三九一二、家持)

……卯の花の 咲く月立てば めづらしく 鳴くほととぎす あやめ草 玉貫くまでに……  
(十八・四〇八九、家持)

……あやめ草 花橘を 娘子らが 玉貫くまでに あかねさす 昼はしめらに あしひきの 八つ峰飛び越え……  
(十九・四一六六、家持)

……明け立たば 松のさ枝に 夕さらば 月に向かひて あやめ草 玉貫くまでに 鳴きとよめ 安眠寝しめず 君を悩ませ  
(十九・四一七七、家持)

は、「玉に貫く」の「に」の省略されたもので、前述と同じであろう。

こうしたものが喩表現に用いられることがないのはどうしてであろうか。これらは玉ではない、橘やあやめ草を玉として見立てて、糸などを通すというのであって、この表現自体に、玉でないものを玉としてみなすという、見立ての意識、譬喩性を帯びているものだからと考えることができるだろう。

おわりに

譬喩の媒体の重ねが、体言(「玉」)＋述語のものは、玉を手を巻く、付ける、取る、見る、知るといった表現は異性を自分のものとするといったことを寓し、玉が自分の手元から離れていることは、顧みない、嫁がせるの意を寓する。また、述語(「玉」を形容する働き)＋「玉」の場合

では、手に巻く玉は愛した女性を、くしげの箱の中の玉は大切な女性を、海底にあるなど手に入れたい玉は深窓の女性を寓する。玉の緒については、貫く、縊る、くくり寄せる、替えるといったものは、どのように貫くかなどによってその様は異なるが結ばれることを寓し、反対に、解く、絶える、乱れるなどは、別れや心変わり、心の乱れを寓する。玉の緒に限らず、糸・綱・紐なども貫く、縊る、巻く、延ばし寄せるなどは、結ばれることを、絶えるは男女の中が絶えることを寓する。こうした寓喩のあり方は、特別な知識や技法を要しない、誰もが表現し得、納得し得る一般性を有しているといえる。ただ、中には「伊勢の海の海人の島津が鮑玉」(七・一三三二)の「島津」、「照左豆が手に巻き古す玉」(七・一三二六)の「照左豆」のような特殊な表現も見受けられるが、これらは一般的な表現に個的な、特殊な事情を詠みこんだ応用的なものといつてよいだろうが、「いなだきにきすめる玉」(三・四二一)は、法華經安樂行品の仏法の至上なることを転輪王の「髻中の明珠」にたとえて、「独り王の頂上にのみ此の一珠有り」とあるのによつての寓喩と解される。これは仏典という顕著な例だが、他にも漢籍に負うものがあることは考えられる(東茂美氏は、四・六五二は漢籍の発想による可能性があることを指摘している。「大伴坂上郎女——歌発想の一基盤——」『文学・語学』八十八 昭和五十五年八月)。そういうことからいうと、玉の譬喩歌もまた、植物を譬喩の媒体とする歌と同様、漢籍の享受によつて新しい文芸として洗練された可能性がある。そもそも玉はその呪性によつて尊重されたものであろうが、万葉集中の玉の多くは呪性から離れていて、美しいもの、称えられるものとして歌われている。白玉(真珠)を始めとして、それを手に入れることができ身につけることができる層を考えれば、玉、玉の緒を譬喩として使い得る層というものはおのずと限定され、そういう意味でも万葉集の玉、玉の緒の譬喩歌はストリートな恋の表現を越えた、文芸として洗練されたものであるといえよう。

玉、玉の緒の譬喩歌にいえる、寓喩のあり方が普遍的であること、恋・結婚にまつわる寓喩であることは、他の譬喩歌に共通していることであり、同時にこの二つの要素は、寓喩の歌に欠くことができない条件である。